

## 物語と企投としての自己理解

——リクルールの「経験の前―物語的構造」概念をめぐって

櫻井 一成

### 序 『時間と物語』から『意志的なものと非意志的なもの』へ

『時間と物語』（一九八三―五年）という全三巻からなる著作全体の企図は、現象学的時間にも物理学的時間にも還元できない人間的時間の成立を、物語行為の観点から明らかにすることにある。この企図からして、『時間と物語』は時間論と物語論をそのうちに含むこととなるが、後者の物語論は、さらに歴史物語論とフィクション物語論に区分されることになる。リクルールは、フィクション物語と歴史物語を併せて論じることによって、それぞれの物語としての独自性を画定するとともに、両者が共有するものとしての物語の構造や機能を抽出しようとするのである。自己理解の哲学としてのリクルール哲学を統合的に理解する作業の一環として書かれる本論文は、『時間と物語』の物語論をもとに、企投と物語が取り結ぶ不可分の関係性を明らかにだすことを目標とする。分析を始めるに先立って、なぜ両者の関係が問題とされなければならないのかを説明しておく必要があるだろう。

リクルールは、『時間と物語』の結論部において新たに「物語的自己同一性 *identite narrative*」という概念を提示している。この概念には「主体は自らが、自らについて、自らに語る物語のうちに、自らを認める [RRII44-5]」という主張が含ま

れている。まず「物語を理解することは、いかにして、またどうして続々と起こる出来事がこの結末へと至るのかを理解することである [TRU30]」、「出来事はその定義を、それが果たす筋の展開への寄与から受け取る [TRU27]」という記述をふまえるなら、われわれは現在の《私》の生起を物語ることによって、なぜ《私》がこの《私》でなければならぬのかを理解するとともに、この《私》を生起ならしめた自らのふるまいや諸々の出来事に意味を与えるのだと言えよう。一方、物語的自己同一性の概念は、「固有名によって指示される行為主体を、誕生と死のあいだにひろがる人生を通してずっと同じ主体であるとみなすことを正当化するものは何か [TRU43]」という問いに対する答えともなる。つまり、通時的変化によって異なる物理的性質や心理的性質を有しているのにも関わらず、われわれがなお同一でいられるのは、変化しない何かを有していたり、変化しない何かであったりするからなのではなく、われわれが回顧的視点から変化の歴史を物語るからである<sup>(1)</sup>。したがって、物語は四次元的個体としての自己の述語面を形象化し、自己が時間の経過を通じて同一の自己であることを根拠づける役割を担うものとして、自己理解に関わることになる。

このような自己を歴史的に物語ることによる自己理解という発想は、『時間と物語』以前にはみられなかったものである。八〇年代以前、自己理解の仕方として特権的であったのは企投としての自己理解であった。既にリクールは一九五〇年の『意志的なものと非意志的なもの』(以下、『意志的なもの』)において、「私は自分を何よりもまず『我意志す』と述べる者として理解する [V18]」と述べ、自己理解の端緒を決意における行為の企投のうちに認めている。さらに一九七〇年代に展開された解釈学的思索においては、企投を自己理解として提示する初期の現象学的分析と、フィクシオン物語の解釈学とが接合されることになる。そこで構想されているのは、解釈においてフィクシオン物語の描く「テキスト世界」が現実への批判的問いかけとして機能し、問いによって賦活された読者の想像力が経験や伝統を参照するなかで新たな自己を生成させるという過程である。リクールはこの構想を「実存の詩学」ないし「意志の詩学」と呼んでいる<sup>(2)</sup>。

それゆえ『時間と物語』を経て、自己理解は二つの時間的 direction へと分化したと言えることができる。すなわち未来志向の自

己理解と過去志向の自己理解であり、『時間と物語』の物語論は過去志向の自己理解への関心を新たに呼び起こした。では一方で、その物語論は未来志向の自己理解をめぐる議論に対して何らかの意義をもつのであろうか。従来のリクール研究ではこの問いに対する分析はほとんど行われていなかった。

この問いに対してまず、『時間と物語』のフィクション物語論によって、意志の詩学としての解釈学は具体性と説得力を増したと答えることができる。フィクション物語と歴史物語を対照させるなかで、フィクション物語のフィクション性と、虚構のテキスト世界を現実世界に適用する読者の役割が前景化されることにより、七〇年代の議論が抱えていた概念構成上の不整合が解消されたからである。さらにわれわれは、『時間と物語』における「経験の前―物語的構造 *structure pré-narrative de l'expérience*」という概念のうちに、物語を読むことが企投を誘発するというような外的な関係とは異なる、企投と物語の新たな関係が示されていることに気づく。リクールはこの概念を、経験そのものが「起動状態にある物語性 *narrativité inchoative*」を有しており、明確に物語られることを要求しているという事態を言い表すために用いている[TRI4]。やはりリクールは行為と物語の関係について次のようにも述べている。

物語によって再度意味づけられるものとは、人間の行動の次元において既に先行的に意味づけられていたものである。さきに見たように（中略）、行為の意味論を構成する間主観的意味作用のネットワークを制御できること、また象徴的媒介や人間行動がもつ前物語的な表現性に習熟していることが、行為の世界についての先行理解を特徴づけるのであった。物語性という観点から見ると、世界内存在とは、この先行理解をもたらすような言語実践によって世界のうちで既に表現されている存在なのである。[TRI53]

この一節で主張されているのは、人間の行為は物語によって自覚的に歴史化され、再度意味づけられるに先だって、既に

「可読性 [isbittie]」を有しているということである。可読性は、行為を目的・手段・動機・状況などの概念によって分節すること、文化や制度を背景に行為の意味を理解し、行為を倫理的に評価すること、行為を前反省的に物語ることによって構成される。このとき重要であるのは、この先行理解は行為の遂行後に、行為を前反省的に物語ることによって与えられるとは限らないということである。つまり物語と自己理解の関係は、物語ることに同時であるような、より内在的な関係として与えられている。実際にリクルールは一九七六年の論文において「企投は物語に構造化の力を借り、物語は企投から先取りの力を受け取る [IDA224]」と述べており、この一節は、人間の行為はその企投の段階において物語として構造化されるということ（および物語の解釈が結末に対する一定の予期を必要とするということ）を主張している。それゆえリクルールにとって、自ら物語ることが、過去志向の自己理解のみならず未来志向の自己理解をも可能ならしめるものとしてとらえられていることが明らかとなる。企投としての自己理解について新たな知見をもたらしたとまでは言えないものの、『時間と物語』の物語論は七六年の論文で示唆されている両者の関係を具体的に理解することに寄与すると言って間違いない。すなわちその物語論は、企投はどのような構造をもつか、構造化はどのような手順で行われるのか、などの問いに答えを与えるという意義をもつ。

ただし企投と物語が取り結ぶ不可分の関係を理解するためには、一方でなぜ企投が物語的構造化を必要とするのかについても明らかにされねばならない。そもそも企投とはいかなるふるまいであるのか、構造化を欠けば企投はどうなるか、などの問いに答えてはじめて、物語が企投に対してもつ意味は十全に理解されるだろう。だがこのような行為論の問題は『時間と物語』の議論の枠組みを超え出るものであり、実際「経験の前—物語的構造」に関するリクルールの説明は断片的なものにとどまっている<sup>(3)</sup>。それゆえこの概念が前提とする企投と物語の内在的な関係を理解するためには、われわれ自身がリクルールの行為論と物語論をつきあわせなくてはならない。

リクルールは行為や企投に関する主題的な考察を『意志的なもの』において行っている。したがって本論文は、『時間と物

語』（一九八三―五年）と『意志的なもの』（一九五〇年）を併せて分析することで、「経験の前―物語的構造」という概念についての具体的かつ包括的な理解を得ることを目指す<sup>(4)</sup>。この作業は最終的に、『時間と物語』における時間論を理解する重要な視点をも与えてくれるはずである。この点については結論において立ち戻るとして、早速分析をはじめることとしたい。

## 1. 物語の制作——『時間と物語』における「筋立て」概念

物語は制作され、読まれる。『時間と物語』において、フィクション物語は主として読書行為の観点から分析され、歴史物語は主として歴史記述の観点から分析されている。経験が前―物語的構造を有しているとすれば、それはわれわれが行為に際して潜在的に物語を制作しているからだろう。それゆえ、以下では歴史記述と物語の関係をめぐるリクルールの記述を検討することによって、リクルールの想定する物語制作がいかなるものであるのかを浮かび上がらせる。ちなみにリクルールは先行する歴史物語論の批判的読解を通じて両者の関係についての思索を進めているため<sup>(5)</sup>、この作業はいきおい読解の読解とならざるをえない。リクルールが参照している歴史物語論を直接要約した上で、リクルールのコメントを検討するという手続きをとることにしたい。

### 1. 1. 統合形象化と物語文

リクルールは物語制作を、「筋立て *mise en intrigue*」や「統合形象化 *configuration*」と呼んでいる。筋立ての第一の特徴は様々な出来事を「とりまとめ *prendre-ensemble*」様々な出来事から「時間的全体の統一性」を引き出すことにある [TRI129]。

おおまかに言ってそれは、出来事の継起に始めと終りを与え、出来事を「ある種の論理的連関」に従属させることである[TR80-1]。では「ある種の論理的連関」とはどのようなものだろうか。リクールは統合形象化の概念を、Louis O. Minkから借りている。まずはミンクの議論とそれに対するリクールのコメントを検討することから、考察をはじめることになる。

ミンクは時間的ひろがりのうちに「継起的に *seriatim*」経験される様々な物事を「一体のもの *totality*」として一度に把握することを「統握 *comprehension*」、「よりまよめ *considering together*」などと呼んでいる。ミンクによれば、統握はさらに、相互に排他的な三つの仕方に分類され、統合形象化はそのうちの一つの仕方として位置づけられる<sup>(7)</sup>。それはある出来事を、もろもろの出来事がとりむすぶ多様な関係によって構成される「複合体 *complex*」の一要素としてとらえることを意味する[MCU39]。言いかえれば統合形象化とは、ある出来事を、出来事同士がつくりあげる「重なりあう記述のネットワーク [HFM58]」のうちに包摂し、そこで出来事に一定の記述を与えることを意味する。より簡単に言って、それはある出来事を他の出来事との相互関係において記述することにほかならないが、ただし統合形象化において「出来事の記述は、その出来事が属するストーリー全体によって決定される [HEM48]」。全体を前提とするという意味において、統合形象化は始めの出来事と終りの出来事を必要とし、終りの出来事がある以上その作業は回顧的な視点からおこなわれるのである。

たとえば、ある朝一人の男が電報を送っているとしよう。この行為は《保有株式に関するオファーを持ちかけられた》という先行する出来事と関係づけられることによって、《株式に関するオファーを受諾した》と記述される<sup>(8)</sup>。電報を送ることは、オファーを受諾する行為の一環として理解されるのである。ミンクによればこのような記述は、「オファーがあったことを述べている先行する言明と概念的に重なりあう [HFM58]」。このとき、オファーを持ちかけられるに先立って、株を売ってはならないという亡父の遺言を受け取るという出来事が起きていたならば、電報を送ることは父親への裏切りの

一環として理解されるだろう。また逆に、『オファーを持ちかけられた』という出来事は、オファーの受諾が引き起こさるる帰結にもとづいて、たとえば『破滅への誘いを受け取った』と記述されるはずだ。

この例からも理解されるように、統合形象化において問題となっているのは、出来事にどのような記述を与えるかということであり、出来事についての記述は当該の出来事が包摂される全体が画定される（変化する）ことによって確定する（変化する）。われわれはこれと同様の考え方を、Arthur C. Danto の議論のうちに認めることができるだろう。続いてダントーによる物語文についての説明を見ておくことにしたい。

ダントーは、起きることを瞬時に転写する「理想的年代記『Ideal Chronicle』」には、始めもなければ終りもないと述べる[Danto152]、出来事を回顧することによってはじめて可能となる出来事についての理解があるとする。より具体的に言えば、この理解は「ある過去の出来事を、その出来事にとっては未来に属するが、歴史家にとっては過去に属する他の出来事と関係づけて記述すること」[Danto15]によって与えられる。たとえば「原因である」、「先取りする」、「開始する」、「先行する」、「生じさせる」などの語は、ある出来事が引き起こした事後の帰結をふまえてのみ、その出来事に対して使用可能である。歴史家とはこのように出来事を回顧的な視点から見るといって、行為者とその同時代人が原理上もちえなかった特権を有する者であり、回顧的視点から過去の出来事について真なる言明や記述をなそうとすることが「歴史の最小特性」をなす[Danto25]。ただし「同じ一つの出来事も、それが位置づけられる物語にに応じて、あるいはそれが後のどのような一連の出来事と関係づけられるかによって、異なった意味をもつ」[Danto11]。したがってある過去の出来事に意味を与えようとするとき、その出来事がそこで意味をもつとされている全体を取り出す必要がある一方で、この意味はさらなる事後の帰結によってその意味を変えることがありうる。この意味で「どのような過去の説明も本質的に不完全」であらざるをえない[Danto17]。

ダントーはこのようにして行われる過去の出来事の記述を「過去の歴史的組織化」、「過去の遡及的再整理」[Danto168]



と呼んでいる。たとえば《一七一三年のその日『ラモーの甥』の作者が生まれた》、《三十年戦争が一六一八年に開始された》などの文が、趣及的再整理による典型的な物語文である。物語文においては、過去の二つの出来事がそれぞれ始めと終りとして設定され、二つの出来事からなる全体において、始めの（より過去の）出来事だけが記述される。したがって、統合形象化にくらべて記述がとりうる視点の位置が限定されているものの（統合形象化には、回顧的でありつつも行為を遂行中の人間にも可能な出来事の記述が含まれる）、ダントーの論じる物語文制作は、ミンクの論じる統合形象化と同じ統握のはたらしによるものであることが明らかとなる。つまり物語文制作は統合形象化操作の一例である。では、リクールが想定する筋立ての作業は、統合形象化操作とどのような関係に立つのであろうか。

まずリクールはダントーの物語文が「歴史のディスクールの論理的原子を構成すること」[TRI263]を認める。つまり物語文の制作はたしかに歴史記述の必要条件である。だが物語文制作は「歴史活動の最小特性を構成するだけである」[ibid]。つまり歴史のテキストを《三十年戦争が一六一八年に開始された》という物語文に還元することはできない。ただしリクールは、単に歴史のテキストは二つ以上の物語文を含むと主張しているのではない。「出来事に意味または重要性を与える」[テキストのレベルでの]「物語的組織化は、物語文の単なる拡大にすぎないのだろうか」[TRI264-5]という反語的な問いが示唆するように、リクールが言わんとしているのは、歴史のテキストが物語的組織化によって成立するとしても、その組織化は物語文制作のうちには含まれていない新たな、別の作業を必要とするということだからである(9)。

とはいえその作業は、ある出来事を「重なりあう記述のネットワーク」のうちに包摂し、一つの出来事を複数の出来事との関係において記述するような作業でもない。たとえ複数の出来事との相互関係にもとづいて、一つの出来事についての記述を行っているとしても、関係づけられる出来事の数が増えているだけで、この作業は物語文制作と何ら変わるところがないからである。たとえばミンクは統合形象化の例として、物語の冒頭においてライオスのことを、《ターバイの王であり、自殺するイオカステの夫であり前夫、山に捨てた息子に殺され、その息子は目をつぶし、国を追われるところの者ライオス



はアポロンの神託を乞うべく……」と記述することをあげているが「MmK59」、この記述は物語文にほかならない。したがってテキストのレベルでの独自の物語組織化を考えるためには、出来事の記述という枠組みから出る必要がある。われわれは、ミンクに対するリクールの次のようなコメントによって、このような解釈を裏づけることができるだろう。

事実、ミンクの分析には、統合形象化操作の特性である「とりまとめる」はたらしきものから、一切の時間的性格を取り去ろうとする傾向が看取される。[TR1282]

ここでリクールが批判しているのは、統合形象化においては「時制」も「偶然性」も消えてしまうというミンクの主張である。実際にミンクは「時間は物語の本質ではない」、「物語の統握において、そのような時間的継起という考えは消えてしまう」と述べ、物語において重要なのは「意味の秩序」であると説明している「HEMS6-7」。リクールにとってこのことは、統合形象化においては時間的継起のなかで出来事がどのように生じたかについての説明は省略されてしまうということを意味する。リクールは以下の引用で、この点を指摘しようとしている。

ある行為を、ある出来事への反応として把握する（「電報を送ること」は「オファーをもらうこと」への反応である）ときに、統握が完成すると主張する議論も正しい。しかし、電報を送ることとオファーをもらうこととのあいだの関係を確実なものにするのは、「オファーを受諾する」という媒介項なのであって、この媒介項が始めの事態から終りの事態への変化を生み出している。[TR1285]

ミンクに従えば、電報を送る行為は、保有株式に関するオファーをもらったという出来事に対する応答として把握されるこ

とによって、「オファーを受諾する」という記述を受け入れるのであった。これに対するリクルールの批判のポイントは、次のようなものであろう。すなわち、電報を送る行為に対して『なぜ電報を送るのか』と問うたとき、『株式に関するオファーをもらったから』という応答が問いに対する十分な回答を構成するとは考えられない。その問いに対する十分な回答は『オファーをもらい、それを受諾することに決めたから』というものである。逆に言えば、オファーをもらったからといって、電報を送ることが決まったわけではなく、両者を結びつけるには『オファーを受諾することを決める』という出来事の媒介が必要なのである。しかし、ミンクは出来事同士の相互記述という点を強調するあまりに、オファーをもらい、電報を送るまでの出来事の経緯（なぜ電報を送ったのか）を切り捨ててしまう。ここからリクルールは、「全てを同時に[*totum simul*]統握することを目指すミンクの統合形象化の概念は、むしろ「筋立てのエピソード的側面の根底にある時間の継起的性格を消し去ろうとする、統握の野心を制限する」ための「限界概念」としてとらえるべきだと主張する[*RI285*]。つまり「全てを同時に」統握しようとする統合形象化のはたらかしは、筋立てをその根底において支えるはたらかしでありつつも、その純粹な実現が目指されてはならないものである。したがって同じ名称を用いているとしても、リクルールの言う統合形象化（筋立て）はミンクの言う統合形象化操作をより弱めたものとして理解する必要がある。

## 1. 2. 自己説明的な物語

前節の読解を通じて明らかとなったのは、リクルールの筋立て概念にとって「時間の継起的性格」が不可欠の構成要素をなすということである。この性格について考えるために、以下では W. B. Galile の歴史物語論を検討することにした。

ガリーによれば、歴史とは「物語という類に属する種 [Galile66]」であり、歴史を理解することは、物語を「フォローする」能力を行使することによって可能となる [Galile105]。物語をフォローすることは「目的論的に方向づけられた注意の

形式」に従って遂行される「Galile64」。それは、登場人物への共感に支えられて、様々な出来事が生起する物語を「約束されてはいるがつねに開かれている結末」へと向けて読み進めていくことである「Galile65」。たとえば、もし主人公が囚人であるなら、われわれは、ストーリーは脱獄か勇敢な死で終わるに違いないと想定し、この大まかな想定がわれわれの期待を方向づける。そして約束されてはいるが開かれた結末が確定し、物語が閉じられるとき、われわれの期待は充足され物語は「統一性 unity」を獲得する「Galile29」。

「開かれている結末」と言われていることからわかるように、どのようなプロセスを経て結末に至るか、具体的にどの結末が実現されるかについては「予見不可能」である。つまり結末へと向けて物語をフォローすることは、「結論が導出される follow」ことと同じではなく「Galile24」、われわれは今までに起きたこと（初期条件）と人間本性についての一般真理（法則）にもとづいて、次に起こることを予測したり演繹したりするのではない「Galile23」。ガリーによれば、物語において先行する出来事と後続する出来事とのあいだにある関係とは、前者が後者を「可能ならしめる」という関係である。つまり二つの出来事は、先行する出来事が後続する出来事の生起を必然的なものにするという関係ではなく、前者が後者にとつての「必要条件」になっているという関係によって連結されている「Galile26」。それゆえ次に起きる出来事が予見不可能であっても、われわれはその出来事を「受け入れる accept」ことができる「ibid」。出来事のあいだに可能ならしめるという意味での「論理的連続性」が保たれており、後続の出来事が「いかにして、またある意味でなぜ生じたか」を理解することができるからである「Galile27」。それゆえ始めの出来事から終りの出来事までの論理的連続性が保たれており、結末を「受け入れる」ことができるとき、物語は全体として、結末がいかにして生じたかを説明することに成功していることになるだろう「ibid」。このような物語は、予見不可能な展開を含みつつも「自己説明的」な物語である「Galile109」。

もちろんこのようなわかりやすい物語ばかりではない。ガリーは一方で、物語に決定的な展開をもたらすのは「偶然の出来事」であると述べている「Galile48」。いっしょに言われる偶然の出来事とは、単に予見不可能な出来事ではなく、物語におい

ていかなる先行する出来事をもその生起の必要条件としていないような出来事と解するべきである。たとえばガリーは極端な偶然性の例として主人公の身に起きる、すべての希望を断ち切るような「予見不可能な災厄」をあげている。この出来事は物語の展開に「完全な非連続性」、「論理的な真空」をつくり出すという効果をもっている [Galilei40]。すなわち偶然の出来事は説明不可能であり「それ自体としては理解不可能 [Galilei41]」である。しかし、われわれは偶然の出来事をも「受け入れる」ことができる。登場人物への共感が失われず、その行く末への関心が保たれ、偶然の出来事がさらなる前進の可能性を完全に排除していないからである [Galilei43]。そしてそのまま特定の結末まで物語をフォローできたとき、われわれは結末を偶然の出来事が可能ならしめたものとして「受け入れ」、いかにしてそれが生じたのかを理解する。またこれと同時に偶然の出来事は、主人公を生まれ変わらせた、性格の変化を引き起こしたなどと言われ、特定の結末が生じることに一定の「寄与」をなしたものとして理解される [Ibid.]。

注意して読むならば、このようなガリーの議論は混乱を招くものである。主人公への共感にもとづいて物語を結末へと読み進めることを妨げないという点で受け入れ可能であるが、その生起を説明できないという点において受け入れ不可能（理解不可能）であるという、偶然の出来事の性格規定が示すように、ガリーの議論において「受け入れ可能性 acceptability」という概念は両義的に用いられているからである。つまりガリーは、ある出来事の生起が先行する出来事によって説明されているという意味での「受け入れ可能性（理解可能性）」と、その出来事の生起が、約束されているが開かれている結末への期待を破壊しないという意味での「受け入れ可能性（フォロー可能性）」という、二つの「受け入れ可能性」を明確に区別していないのである。しかも受け入れ可能性が二種類あるとすれば、結末が受け入れ可能であるという事態も二義的なものとなり、このことは物語の理解を「フォロー」という概念だけでは説明することができないということをわれわれに示唆している。

偶然の出来事は理解不可能であるのにも関わらず受け入れ可能であり、物語の「フォロー可能性」を損なわなかった。そ

うすると中間の出来事がすべて偶然の出来事であるとしても、物語のフォロー可能性は成立することになってしまう。われわれはただ期待に引っ張られるかたちで物語を先に読み進めるのである。このとき物語の結末はそれが単に期待を充足するがゆえに、つまり開かれてはいるが約束されている結末を確定させ、物語を閉じるがゆえに結末として受け入れられることになるだろう。実際ガリーには物語の「統一性」や「結末の受け入れ可能性」を、期待の充足の観点から説明しているような議論が認められる「Galile28-9」。このように考えるなら、結末がいかにして生じたのかについての理解は、物語の結末が受け入れ可能であることに何の寄与も果たしていないことになるだろう<sup>(10)</sup>。したがって、われわれは物語を終りまでフォローしたというだけでは、結末の生起が説明され、物語が自己説明的であるなどとは言えない。

だがガリーには、期待に引っ張られて物語をフォローするという議論に隠れて、先行する出来事との論理的連続性が出来事の受け入れ可能性（理解可能性）を構成するという議論も認められた。このような出来事についての理解は、単に期待に導かれて物語を読み進めるだけでは与えられないはずだ。出来事同士のおいだに論理的連続性が保たれているかどうかは、先行する出来事との関係において判断されるべきことであり、この判断は回顧的な視点によって行われるからである。言い換えれば、ある出来事E<sub>2</sub>が先行する出来事E<sub>1</sub>によって引き起こされたと理解することは、ある出来事E<sub>1</sub>が後続する出来事E<sub>2</sub>を可能ならしめたことを理解することと同時になければならない。ガリーの例においても、偶然の出来事が理解可能となるのは、特定の結末が与えられ、その結末がいかにして生じたのかを理解されるのと同時にとされていたはずである。

正確な判断は難しいところであるが、おそらくガリーも二つの受け入れ可能性の違いにある程度自覚的であったと考えられる。たとえばガリーは、われわれは歴史の著作を読むとき、出来事や出来事の連鎖を結末の必要条件として「フォローし、とりまとめる consider together」[Galile109]ものであり、このようなことが可能である場合、結末の生起は物語の過程それ自体によって説明されたと言ってもよいだろうと述べているからである。ここで言われる「とりまとめ」には、回顧的な視点からの理解が読み込まれていると考えられる。つまりそれは出来事の統握による理解である。そしてリクールはこの

点をより前置化させて、次のように述べている<sup>(11)</sup>。

物語をフォローすることは、期待に導かれて偶然の出来事や予期せぬ出来事のなかを前に進むことであり、その期待は結末において満たされる。この結末は、先行する何らかの前提によって論理的に導出されるものではない。結末は物語に「終点」を与え、そしてこの終点が一つの全体を形成するものとして物語をとらえることを可能にする視点を与える。物語を理解することは、いかにして、またどうして続々と起こる出来事がこの結末へと至るのかを理解することである。

#### 〔TR130〕

つまり「この結末」がいかにして生じたのかを理解することは、結末が与えられた上で、当該の結末の生起を可能ならしめている出来事の展開を反省的にとらえ直すことであるというのである。言い換えれば、結末が受け入れ可能であるためには「まなざしを結末から中間のエピソードへと振り戻し、これらの出来事、この行為の連鎖をこの終りは必要としていたのだ、と言うことができなければならない〔TR1268〕」。したがってリクールが、ガリーの議論のうちに、ガリー以上に物語理解の回顧的側面を強く読み込んでいることは明らかであろう。リクールはミンクとガリーの批判的読解を通して、両者を弁証法的に統合するような仕方でも物語の理解をとらえようとしているのである。そしてこのような理解は、結末をふまえた上で、結末を可能ならしめるものとしての出来事の論理的展開を批判的に検討し<sup>(12)</sup>、またそれぞれの出来事を意味づけながら<sup>(13)</sup>、物語を始めから終りへとたどり直すことによって与えられる。リクールにとって物語を理解することは、与えられた結末へと向けて、時間における出来事の展開を回顧的かつ目的論的にフォローし直すことなのである。

このような解釈は、リクールが物語ることの特性を「偶然性と秩序の、エピソードと統合形象化の、不調和と調和の弁証法〔TR1282〕」に求めていることによって裏づけられる。物語ることの弁証法的性格について確認することにしよう。まず

リクルールはフォロー可能な物語について、次のように述べている。

どんな物語も「なぜ」という問いに応えるのであり、同時に、どんな物語も「何が」の問いに応える。何が起きたかを語ることは、なぜそれが起きたのかを語ることである。[TR1271]

たとえばしばらく見なかった友人が、ひどくやつれた姿で目の前に現れたとしよう。このとき、われわれは「何があった」と問うだろう。そして何があったかを説明することは、どうしてそのような状態になったのかを、当該の状態を結末とする物語を語ることによって行われる。たとえば彼は《起業したのだが、先の金融危機で会社の経営がうまくいなくなり、倒産した。今では妻子にも逃げられ、食うや食わずの生活を送っている》と答えるかもしれない。この物語は起業時の元気な自分が、結末としてのやつれた自分に変化するまでの出来事の推移をたどるものであり、結末がたしかにこれらの推移を通じて可能なものとなったと判断されることによって、現在の彼の状態は理解可能なものとなる。

したがってこの例が示すごとく、自己説明的な物語の制作とは与えられた結末がいかにして生起したのかが明らかになるように、先行する出来事を取捨選択し、目的論的に組み立てていくことである。このとき、物語の制作はさまざまな出来事のある目的へといたる論理的関係のもとに包摂しているのだから、制作の作業は一方で統合形象化操作である。それゆえ物語は、単に出来事を時間順に列挙したものである年代記のエピソード的性格を超える構造的な特性をもつ<sup>(14)</sup>。だが他方で、物語における出来事の論理的展開は、時間における出来事の展開でもあり、自己説明的な物語はその時間的性格を失っていない。この意味で結末の生起へと向けて目的論的に組み立てられる物語は、意味の秩序と「時間の継起的性格」を両立させる。

さらに、この両立は次のような意味を持っている。もし時間の流れとともに生起するものとしてのみとらえられるなら



ば、すべての出来事は他の出来事とのつながりをもたない偶然の出来事としてとらえられるだろう。そこに理解可能性はない。このときわれわれは出来事の生起に目的論的秩序を読み込むことによって出来事に意味を与え、出来事を結末の生起にとっての必要条件として物語に包摂する。しかし単に結末の必要条件として出来事をとりまとめるなら、出来事の偶然性が問題となることはない。偶然の出来事は自らに先行する出来事との関係（関係がないという関係）においてのみ偶然であると理解されるからだ。この意味で偶然の出来事を語るには時間的ひろがりが必要である。このとき自己説明的な物語は、意味の秩序を時間における出来事の目的論的展開として与えることによって、先行する出来事との関係においては偶然적でありつつも結末との関係においては理解可能な出来事の包摂を可能とする。かくして自己説明的な物語の制作は「偶然性と秩序の、エピソードと統合形象化の、不調和と調和の弁証法」としてとらえられることとなる。

### 1. 3. 物語の制作——主題、法則、反省的判断力

物語の理解は、時間における出来事の展開を回顧的かつ目的論的にフォローし直すことによって可能となり、物語を制作することも同様の作業によって行われることが明らかとなった。しかし、物語を回顧的かつ目的論的に理解することと、物語を回顧的かつ目的論的に制作することとのあいだには決定的な違いがある。その違いは、制作においては統握すべき出来事がすべて与えられているわけではなく、そもそも始まりの出来事も決定されていないという点に存する。それゆえ自己説明的な物語の制作は、結末となる出来事と、一連の出来事の発端となった始めの出来事を特定した上で、終りの出来事が生じるにいたるまでの出来事の展開を両者のあいだに充填するという作業を必要とする。

始めの出来事の設定は、もしそれが特定されなければ、出来事の連鎖が無際限に拡大していくことになってしまうという意味において重要である。また「いかにして生じたのか」を説明する物語の場合、物語の始めが任意に設定可能であること

を考えるなら、物語はその始めと終りに特定の出来事を置くことによって物語全体に一定の「主題」を与えることにもなるだろう。たとえば先にあげた友人は、起業時の元氣な自分が、現在のやつれた自分になるまでの過程を物語ることによって、自らの没落という主題を伝えようとしているのである<sup>(5)</sup>。

さらに物語はこのように始めと終りを画定した上で、その中間の出来事を充填しなければならない。ではこの充填はいかにして行われるのか。ガリーによれば、歴史家は物語によって説明を行う際に、伝統的な自明の理から社会科学の法則や抽象モデルまで、あらゆる種類の一般的知識を用いる<sup>[Galie84]</sup>。つまり歴史家は様々な法則に依拠することによって、ある出来事にとっての必要条件を発見する。またダントーも、物語の中間部分は一般概念や一般法則に照らして選び出されると言う<sup>[Danto238]</sup>。ダントーによれば、歴史の説明において説明されるべき被説明項は物語文それ自体であり、物語文によって指し示された変化を引き起こした出来事（原因）を特定することが説明の課題である<sup>[Danto233]</sup>。たとえば駐車していた車のバンパーが凹んでいるとき、この凹みを説明するためには、ある時点においては凹んでいなかった車が、別の時点においては凹んでいるという物語文を作成し、この二つの時点のあいだで凹みという変化を引き起こした出来事を特定する必要がある。このときわれわれは、自動車が発見的にそのような状態になることはなく、凹みができるためには外部からの力が必要であると考えることによって、原因が何であるかを推論する。ただし一般法則からの推論だけでは、中間の出来事が実際に何であったのかを特定することはできず（友人によるバット攻撃か、別の車がぶつけたのか）、特定のためには「歴史的証拠」が必要となる<sup>[Danto243]</sup>。

したがって物語制作はさまざまな一般法則や証拠を用いることによって、出来事の論理的連鎖を組み立てていくのである。一方でそれらの法則が共有されていることが物語の展開を受け入れ可能なものとする。リクルはなかでもガリーの主張をふまえた上で、「分類上のものであれ、因果に関するものであれ、理論的なものであれ、最も小さな物語でさえも一般化をそのうちに組み込んでいる<sup>[TR275]</sup>」と述べ、物語の説明が法則を必要とすることを承認している。ただし歴史物語

に関する限り、リクルールの主張はより強い。なぜならリクルールは「歴史科学は物語の骨組みから、説明の過程を引き離し、その過程を明確な問題系に昇格させる」と述べ、歴史記述において「説明の形式は自律的なものとなる」[TRI311]と主張するからである。つまりさまざまな証拠や法則を用いて自らの説明の妥当性を保証すること、また他の歴史家の説明を批判的に検証することが歴史記述にとって重要な営みをなす。歴史の説明は「認証と正当化をめぐる審判手続き」を受けるのである、この点において「歴史家は裁判官と同じ立場にいる」[ibid.]。

リクルールは歴史記述における説明の自律をアナール学派、とりわけブローデルの読解を通じて論じているが、その分析は本論文が扱うべき範囲を超えている。この点については機を改めて論じるとして、ここでは最後に「裁判官」の比喩について一言つけ加えておくことにしたい。というのもリクルールが歴史家を裁判官に比するとき、そこには認証と正当化を通じて判断を下すという以上の共通性が読みとられていると考えることが可能だからである。

まず所与の実例に関して、その特殊性や個別性を抽象化することなしに判断を下さねばならない裁判官にとって、自らの判断を決定してくれる規則は存在しない。いかなる法を適用しどのような裁量を与えるかは、過去の判例を参照し、また様々な状況を比較衡量することによって決定されるほかないのである。この意味で裁判官の判断は反省的判断である<sup>(19)</sup>。一方、出来事の個別性や偶然性を前にした歴史家は、出来事のうちに終りと始めを読み込み、終りの出来事の生起が説明されるように目的論的に出来事を組み立てることによって出来事に意味を与える。言い換えれば歴史家は一つの目的に統制された全体を仮構し、そこに多様な出来事を包摂しようとする。もちろん歴史家にとって出来事の組み立てが妥当かどうかを決定する規則はなく、説明は様々な法則を組み合わせ、他の歴史家の記述を参照し、歴史家の共同体の慣習に従うことによって行われるほかない。それゆえ歴史家による歴史制作もまた反省的判断力にもとづいている<sup>(20)</sup>。実際にリクルールは「様々な出来事から時間的全体の統一性を引き出す」作業を反省的判断力の働きに結びつけており「[TRI]29」、裁判官の比喩にはこのような認識が込められていると考えることが許されるだろう。

## 2. 企投と自己理解——『意志的なものと非意志的なもの』における決意の現象学的分析

第一章では、経験の前—物語的性格を理解するためにリクルールの筋立て概念を分析した。以下では、『意志的なものと非意志的なもの』における「決意」の現象学的分析を読解することによって、行為および企投が物語構造を受け入れる理由を明らかにする。

### 2. 1. 意志作用とコギト——問題としての経験主義

『意志的なものと非意志的なもの』は全三部から構成されている。この構成は、「意志 *volonté*」が「決意すること *decider*」、「行動すること *agir*」、「同意すること *consentir*」という三つの契機に分節されることと対応している。行動とは、決意を實在的なものにするために自らの身体を動かすことを、同意とは、自らには動かしようのない外的な必然性、絶対的に非意志的なものを受け入れることを意味する。本章が主題的に扱うのは、決意を扱う第一部の前半である。第一部の議論は分析の視点によってさらに二つにわかれ、前半部（第一章と第二章）は決意についての「純粹記述」を行い、ここでは決意の「意味」がその「瞬間的断面」において分析される。それは決意の「形相学」、すなわち決意を決意たらしめる本質をとらえる作業であり、決意を他の心的作用から区別する弁別特性を明らかにする作業である。一方、後半部（第三章）では、「持続 *durée*」における決意の生成が取り上げられる。これは「ためらい *hesitation*」や「熟慮 *déliberation*」を経て、決意が「選択 *choix*」として成立する「歴史」を明らかにする作業である。

決意の純粹記述を行うにあたって、リクルールは批判的対話者として経験主義ないし経験主義的心理学を登場させている。それゆえ決意の純粹記述は経験主義に対する反論という性格を有しており、経験主義との対照においてリクルールの主張もよ

りよく理解されるだろう。

リクールによれば経験主義の特徴は、それが「作用を事実・還元する」点に求められる。還元とは「内観」を「自然主義的な話法」を用いて語ること、すなわち「……がある」という話法を用いて語ることによって、心的作用を「自然における他の事実と同等の、非人称的事実を語る言語に翻訳する」ことである[VII3-4]。たとえば、知覚は《私が鳥を見た》ではなく《鳥の知覚がある》と、欲求は《私は食事を欲する》ではなく《食事への欲求がある》と翻訳される。したがって経験主義に従えば、心的現象を「自我」という主観的作用として記述する必要はない。作用の起点としての自我とは、事後の反省によって構成された虚構にすぎないことになる。

リクールは経験主義の勝利は「自然でもあり、必然的でもある」[VII6]と述べつつ、自我を「非空間性・統一性・同一性などの属性をもった不変の実体」[VII34]としてとらえることを否定している。それゆえリクールは経験主義の主張を部分的には承認していると考えることができる。しかし一方でリクールは、経験主義によっては「自由」ととらえることができず、「非意志的なものと意志的なものの関係を理解するためには、一人称としてとらえられたコギトが自然主義的態度から絶えず奪回されている必要がある」[VII2]と主張している。主体による意志作用は《欲求がある、思考がある、欲求と思考によって身体運動が引き起こされた》というような経験主義的翻訳を受けつけないとするのである。

意志作用が決意し、身体を動かし、外的必然性に同意するはたらきに分節されるのならば、意志の主体であるコギトとは、これら全てのはたらきの起点になるものでなければならぬ。また決意そのものが、感覚や欲求を持ち、熟慮を行い、選択することによって構成されることを考えてみても、このコギトは個々の作用には還元することができない「統合的なintegral」コギト[VII3]、さらには通時的な同一性を有する「人格」でなければならぬ。このとき、意志作用において行動の実現を担う身体は、人格によって所有されるものとしてとらえられる。リクールは人格に影響を与えつつ、人格の支配を受ける身体を「主体―身体」と呼び、人格から切り離され経験主義的にとらえられた身体としての「対象―身体」と区別

する。「対象―身体は他の諸対象との横の関係のみを持ち、主体による統治への従属関係などもたない」[VII5]。それゆえ対象―身体はつねに自然的必然性の支配を受ける。これに対し主体―身体の運動は、人格による統御を受けることによって、自然の出来事の因果連鎖を切断しそこに介入する手段として理解される。それは同時に主体―身体の運動を行為として理解することでもある。つまり行為を行為としてとらえるために、われわれは人格を想定しなければならず、このことは知覚に対しては責任が問われないのに対し、意図的な行為に対しては責任が問われるという事実によって例証されるであろう。

たしかに、意志を人格の心的作用として記述するならば、それは経験主義的な還元を許さない。だが意志を人格と結びつけるだけでは、人格も反省によって仮構的に付け加えられたものにすぎないという反論を斥けることはできない。われわれは、事後的に還元不可能な人格なるものをでっちあげているだけかもしれないのだ。この問題を解決するには、意志のはたらしそのものが自由を前提にしており、意志作用が反省に先立って人格と不可分の関係を取り結んでいるという事実を明らかにしなければならないだろう。リクールが決意の純粹記述において行っているのはこの作業であり、たとえばリクールは次のように述べている。

分析の焦点は、前・反・省・的・な・自・己・帰・責・と・呼・ぶ・る・よ・う・な・、企・投・の・一・局・面・を・浮・か・び・上・が・ら・せ・る・こ・と・に・あ・る・。ま・だ・自・己・に・対・す・る・眼・差・し・に・な・っ・て・い・な・い・自・己・へ・の・指・示・と・い・う・も・の・が・あ・る・に・違・い・な・く・、そ・の・指・示・は・思・弁・的・な・仕・方・や・、よ・り・正・確・に・は・観・察・的・な・仕・方・で・な・さ・れ・る・の・で・は・な・く・、自・己・自・身・に・対・し・て・か・か・わ・り・、自・己・自・身・に・働・き・か・け・る・よ・う・な・仕・方・で・な・さ・れ・る・に・違・い・な・い・。つ・ま・り・決・意・の・作・用・そ・の・も・の・と・厳・密・に・同・時・で・あ・り・、何・ら・か・の・仕・方・で・自・己・自・身・に・対・す・る・作・用・で・あ・る・よ・う・な・、自・己・自・身・の・巻・き・添・え・が・認・め・ら・れ・る・は・ず・で・あ・る・。反・省・の・可・能・性・を・萌・芽・と・し・て・含・み・、意・志・作・用・に・「そ・れ・を・行・っ・た・の・は・私・だ・」と・い・う・責・任・判・断・の・準・備・を・さ・せ・て・い・る・の・は・、こ・の・自・己・自・身・の・巻・き・添・え・に・あ・る・。[VII57]

この一節において、なされた行為の責任を行為者に負わせることを準備しているのは、決意や企投における「前反省的な自己帰責」ないし「自己自身の巻き添え」であるとされている。自己自身の巻き添えが決意と「同時」であるとは、企投された行為の主体と、いま決意している主体とが関係づけられるとき、そのときに限って決意は成立するという論理的同時性を意味する。決意の独自性に関するリクルールの説明を詳しく分析することしよう。

## 2. 2. 決意という志向性——前反省的な自己帰責

《私はXを信じる》、《私はXを欲する》、《私はXを決意する》などの判断（思惟）は、対象へと向かう「遠心的運動」であり、リクルールはこのような運動をフッサルルにならって「志向性」と呼ぶ。遠心的という語は、思惟において「私は自らが見たり、想像したり、欲したりしているものと合体している」という事態を意味しており、それゆえ「思惟の第一次的な志向は、私の存在を私に証言してくれるようなものではない」[V42]。したがって決意においても「私」は、決意の対象としての「企投のうちに自らを忘れ、企投のうちにあって自らの外にいる」[ibid.]。

リクルールは、志向性の対象（X）を、命題構造を有するものとして説明を行っている。この命題は「中立的な意味」[V43]と呼ばれ、中立的な意味とは、たとえば「私が旅に出ること」「雨が降ること」のように、「絶対不定法」もしくは「que」で始まる従属節によって表現される「出来事や行為の構造」のことをさす<sup>18</sup>。志向性はこの中性的な意味を現実の事態によって「充足」されるものとして「空虚に指示する」。決意において、空虚な指示は「企投と同じ意味の行為によって企投を補填すること」[V45]によって充足されるだろう。

一方、諸々の判断はそれぞれの判断が指定する「充足のされ方」の違いによって区別される[ibid.]。まず判断は理論的判断と実践的判断という二つの種類にわけられる。存在判断であれば、実在する物の現前ないし準現前がこの空虚を充足



し<sup>①9</sup>、実践的判断であればこれから「なされるべき」私や他者の身体活動が空虚な意味を充足する[ibid.]<sup>(20)</sup>のとき、実践的判断としての決意の充足のされ方の特徴は次の点に求められる。

実践的言表と理論的言表のあいだの大きな断層の内側で、新たな区分が示される。《なされるべきこと》を実践的に指示するあらゆる作用のなかで、決意が二つの特徴によって識別される。決意は①断定的に、②自分自身の行為を、指示す<sup>20</sup>。[ibid.]

まず決意が指示する対象は「私に依存ししかも私の能力のうちにある未来の行為」、つまり「私によってなされるべきであり、また私によってなされうる」行為である。この点において、決意は他者の行為を指示する「命令」とは区別される。さらに決意はその断定的な性格によって「逃げ腰の仕方で目指す弱い意欲」や「漠然とした願い」から区別される。したがって決意とは、私が必ずなさなければならぬ行為を空虚に指示することである。この意味で、決意は決意された行為の遂行に対する責任を決意する主体に要求する。リクルは決意と責任の不可分の関係について次のようにも説明している。

私は企投された行為の主体として企投のうちに——すなわち意志された対象のうちに——現れる。たとえ私が、企投の瞬間に自らを決定する主体として自分のことを考えないとしても、また私が決意の言葉で「それを行うのは私である」ということを強調しないとしても、私は自分自身を企投のうちに巻き添えにするのであって、これからなされる行為の責任を自分に負わせるのである。[VI46]

この一節では、決意において行為を企投することが、同時に（自動的に）決意する主体に決意された行為そのものへの責任

を負わせることになる」と説明されている。これは決意した以上、決意された行為は私によって必ず遂行されなければならないということ、この責任を引き受けなければ決意は成立しないということの意味する。つまり決意という志向性の独自性は《決意された行為は、決意した者によって必ず実現されなければならない》という規則によって構成されており、決意はその充足の条件に決意そのものを自己言及的に含んでいるのである。したがってこの規則に従わずに決意することは論理的に不可能であり、決意した以上、決意した者は未来の行為の遂行に対して自動的に責任をもつことになる。

そしてこの論理的に成立する帰責が、企投する主体と行為する主体を結びつける。決意の規則に従うことによって、企投された行為の主体が反射的、再帰的に企投する主体と同一視されるのである。このような再帰性こそ、未来の主体と現在の主体を同じく「私」と呼ぶことを可能にしているものにほかならない。すなわち「私」は決意を通じて「展開された統覚 *aperception développée* [VI55]」となるのであり、「私は企投された行為の主体として企投のうちに現れる [VI46]」。時間的ひろがりにおいて存在するコギトとは人格のことであろう。したがって、少なくとも決意という志向性に関して言えば、人格の存在は事後的に付加された虚構ではないと言うことができる。

ただし責任の論理的な発生についての説明が、決意をその「瞬間的断面」において記述したものであることに注意しなければならぬ。つまり、責任は単に決意の瞬間に発見されるのではない。われわれは自らがなすべき行為を突然選択するわけではなく、決意するために、自らの能力を確認し、行為をさまざまな観点から評価し、目標達成までの道筋を構想するといった熟慮の過程を踏んでいる<sup>2)</sup>。この熟慮の過程を維持しているのは、自分は企投の責任を取りうるのかという問いであろう（このような問いは、熟慮の主体が決意することの規則を理解していることを示している）。それゆえ決意の生成の「歴史」をふりかえれば、熟慮における《責任をとりうる》という判断が決意を可能にしたとすることが出来る。決意と熟慮との関係は、決意することが前提されなければ熟慮の過程が維持されることがない一方、熟慮によってはじめて自己帰責の準備が整うという意味において相互規定的である。そして決意が熟慮を必要とするのであれば、決意のコギトは自ずと

「統合的なコギト」であることになろう。

さらに、決意が真に決意として成立するのは、決意の瞬間ではなく決意の後であることも重要である。なぜなら「私が何もなさない限り、私は全く何も意志していなかった」[VI88]ということになるからである。つまり決意は責任を果たすための行動を必要とする。決意する者は、自らの決意を真の決意とするために行動し、企投の実現に向けて努力しなければならない。このとき企投が行為する自己の企投でもあったことを考えるなら、努力の過程を自己制作の過程としてとらえることが可能である。実際にリクールは「企投し何かをなすとき、私は私を投げ出し、私を作る」[VI7]、「行為の企投のうちに自らを巻き込んでいる存在は、企投と同時に自らを作者としても認めている」[VI6]と述べ、企投を自己制作の端緒として説明している。責任感に支えられた努力の過程は、「展開された統覚」としての自己を実在的なものとするための過程でもある。

以上から、《決意された行為は、決意した者によって必ず実現されなければならない》という規則が決意という志向性を構成する一方で、決意の成立には決意の瞬間の前後の文脈が必要であることが明らかとなった。つまり決意することができるとは、自己を抽象的に措定する主体ではなく、熟慮し、決意し、努力する主体としての人格である。未来の自己に対する責任が、自己を人格ならしめることを要請し、可能にしているのだと言ってよいだろう。

ところで決意が生成の歴史として熟慮の過程を有しているということは、意志作用が非意志的なものとの折衝を行っていることとして理解することができるといえる。たとえばリクールは「コギトは自らが根差している固有の環境 conditions を受け入れ、それと対話することによって生きる。自我のはたらかきは同時に参加である」[VI21]と述べているからである。以下では、この折衝や参加の諸相について確認することにした。そこにおいて、企投が物語を必要とする理由も明らかとなる。

## 2. 3. 意志的なものと非意志的なものの折衝——動機、能力、予見される未来

リクルールによれば「動機のない決意というものは、存在しない」[VI64]。それはまず、いかなる決意もその動因を有しているということ、決意は動機を端緒として開かれるということの意味する。ただし意志作用そのものは動機を生み出すことができない。それゆえ決意の源泉は意志作用の外部、すなわち非意志的なものの方にある。たとえば身体的な欲求、他者からの命令、社会規範や道徳などが動機として与えられる。これら動機は「最上位の価値を含め、あらゆる価値の感情的共鳴器になっている」[VI75]。身体を通じて、われわれにはたらきかける。もちろん身体それ自身も「自発性」を有しており、主体はつねに身体からのほたらきかけを被るなかで自らの決意を準備する。

だが動機は決意を決定するのではない。「動機は必然化することなしに傾ける」[VI66]。つまり動機とは決意の「理由」として採用されるものであり、われわれは「…だから *parce que*」という表現を通じて決意を動機づけるのである [VII1]。それは決意を「基礎づけ、合法化し、正当化する」[VI66] ことと等しい。したがって先の一節が十全な仕方で理解されるのは、意志作用によって動機づけられていない決意は存在しないという意味においてである。動機づけの契機を欠けば、決意は自然の必然性のうちに解消されるだろう。動機づけとは「非意志的なものと意志的なものを接合する最初の機構である」[ibid.]。

たとえば恋は突然やってくる。この恋に動機づけられて告白した場合、その行為は《好きだから告白した》と記述される。このとき、リクルールによれば、恋愛感情が動機として記述される以上、恋愛感情と告白の関係は原因と結果の関係ではない。因果的説明において原因は結果を引き起こすのに十分であり、原因としての出来事と法則から次の出来事が必然的に帰結する。これはある出来事から続く結果を予測することと同じことであり、原因は結果から独立して理解可能である。一方、恋愛感情は告白への意志を必ず引き起こすわけではない。たとえばお互いの家同士が対立し合っているために、恋が告

白に結びつかない場合もあるだろう。つまり意志作用は、感情の要求を拒否することができる。「意志はつねに、何らかの仕方でノンと言う [VI21]」と言われるように、選択の可能性が認められる場合にのみ意志は意志たりうるのである。したがって、恋愛感情が告白の動機となるのは、告白が恋愛感情を動機として採用しているときに限られる。つまり動機が何であるかは決意を離れては理解できない。「動機は、意志が意志自身をそれに基礎づける場合にのみ、その意志を基礎づける。動機は、意志が意志自らを決定する限りにおいて、意志を決定する [VI65]」。

このように、動機という観点からみれば、身体は外的な非意志的なものによるはたらきかけの回路として、またそれ自身非意志的なものとして、意志作用を賦活するものであると言える。意志はこれら非意志的なものとの折衝において、自らのなすべき行為を決意する。だが一方で、われわれは自分がなしえないことを決意することはできない。したがって意志作用は、行為する私の「能力」と「現実の秩序」も考慮に入れなければならない。

リクルールは現実の秩序（事物の秩序）が許容する可能性を「理論的意識に提供された可能性」と呼ぶ [VI52]。これは私によって発見ないし予見される可能性であり、我々にはこの可能性を変更することはできない。たとえば《朝四時の電車に乗ろう》と考えたとしても、その時間に電車が動いていなければ決意は成立しない。したがって意志作用は自らが予見する可能性に同意するほかになく、「意志は自らが企投する可能性を、自らが予見する可能性と一致させるように強いられている [VI53]」。ただし「現実の一部は、企投によって先取りされた可能性の意志的現実化である [ibid.]」と言われるように、「理論的意識に提供された可能性」はわれわれの企投によってその現れ方を異にする。鉄道の運行予定が私にとって許容と禁止として発見されるのは、私が旅に出ることを考えているからである。したがって予見される可能性と、企投によって開かれる可能性（実践的意識によって開かれた可能態）とは相互規定的である。企投される可能性が予見される可能性に一致するかどうか確認され、今度はその確認が企投される可能性にフィードバックされ、また新たに確認作業が行われる、という仕方である。実際の企投は具体化されていくと言うことができよう。

ここで、企投によって開かれる可能性が「能力の感情」にもとづいており、予見される可能性が、現実の秩序が私の身体運動に対して許容する（禁止する）可能性であることを考えるならば、「企投によって開かれる可能性と、世界によって許容される可能性を媒介するのは、身体が担う能力にほかならない」[VIS4]ことが理解される。われわれは、現実の秩序のなかでどのように運動することができるかという観点から企投を具体化させていくのである。このような媒介は、身体が私の身体である一方で、自然の秩序と因果関係を取り結ぶ身体でもあることによって可能となる。つまり私の主観―身体が同時に自然にも属するものであるがゆえに、私は行為者として自然の因果連鎖に介入することができる。リクルールはこのことを「人間の活動と世界の秩序が、意志による運動という仲介によって、同じ実存の生地のうちになりにめぐる」[VIS3]と表現している<sup>(22)</sup>。この一節にもとづくなら、行為することは、自らの身体運動によって現実の秩序に介入し、また現実の秩序を用いることで、自らの目的を達成せしめること、すなわち意志的運動と事物の秩序との協働を通じて新たな現実を出現せしめることであると言える。したがって、われわれは世界のどの部分が利用可能か、また自らの運動でどのように世界を変化させることができるかという観点から、企投を具体化させると言ってもよい。世界はわれわれが参加し、利用し、実現させるものであり、身体はそれ自身が意志的<sup>・</sup>なものとして、非意志的<sup>・</sup>なものとの折衝を可能にする媒体である。

結局、非意志的<sup>・</sup>なものとの折衝という視点から、決意を準備する熟慮の過程を大まかに記述するならば次のようになるだろう。意志の主体は非意志的<sup>・</sup>なものによる賦活を被ることで新たな可能性をとりあえず企投する。この企投は、主体が自らの能力とさまざまな非意志的<sup>・</sup>なものとの出会う契機となる。そして主体は企投された可能性を諸々の価値によって動機づけるなかで、また企投された可能性を実現させる道筋を構想するなかで、企投の内容を修正し具体化する。このとき動機、構想、決意は運動して変化し、三者の関係は実際に決意がなされたときにはじめて確定する<sup>(23)</sup>。このような熟慮の作業は、与えられ、新たに出会った非意志的<sup>・</sup>なものを行為の企投へと収斂させ、未来の行為との関係においてそれらを理解するという点において、統合形象化のはたらきによっていると言いうことができる。このことをふまえつつ、非意志的<sup>・</sup>なものとの折衝

について具体的な説明を行っている以下の引用を読むならば、われわれはリクールが「経験の前―物語的结构」という概念を提示するに至ったより明確な理由を理解することができる。

まず、日付や期限、未来の状況についての素描を前もって手にしているという条件に従ってのみ、私は企投をなすことができるように思われる。それらは本質的に私の掌握を逃れた出来事なのであるから、私はそれらを予見するよりほかにない。私は、天体の運行や全体の秩序によってその大枠が決定された世界の隙間に、自らの企投を収めるのである。さらに、私の企投そのものが、様々な手段を用いる一つの行為「目的」を先取りしている。しかるに、ある手段を他の手段や目的に従属させることは、遷移や因果についての知識を前提とする。「したがって」目的とはそれを引き起こす原因を組み立てる規則として考えられた結果にほかならない。[VI49]

引用においては三つのことが言われている。一つめは、事物の秩序の成り行きは概ね決定されているということである。世界が因果の体制に従っているがゆえにそれは決定されており、予見可能である。そしてわれわれは来るべき世界の状況を予見しつつ、その因果の体制を利用するべくそこに自らの身体を参加させる。

二つめは、企投は計測可能なものとしての時間を必要としているということである。「日付」「期限」「天体の運行」などの表現は、我々が企投において時間を考慮にいれなくてはならないことを示している。つまりわれわれにとって、予見とは《いつ》何が起きるのかを予見することであり、企投とは《ある時点において》行為をなすことなのである。時間の考慮の必要性は、世界で起きる出来事の時点と行為の時点との関係が理解されなければ、つまりタイミングを間違えれば、現実の秩序を利用したり、そこに参加したりすることができないという事情によっている。同様のことは、世界のなかでなされる共同的な企投についても言うことができるだろう。時間の計測は「天体の運行」にもとづいて行われ、この時間の不可逆的



な進行はわれわれには変更しようがない。だがこの非意志的な時間が客観的に存在し、その進行が考慮に入れられることによって、はじめて世界は許容と禁止の総体として立ち現れることになる。

第三に、リクールは三段論法を用いて、目的としての行為が原因としての諸手段を通じて引き起こされる結果であることを明らかにしている。「project」の一般的な語義が示すように、企投とは行動の計画を立てることである。決意の端緒において、この計画は現在の私と未来の行為者としての私を結びつけるだけの大雑把なものである。だが、実際に計画を実現するためには他にも様々な過程をふまなければならない。たとえば、来月までに五キロ痩せるためには、アルコールと炭水化物の摂取を控え、毎日プールで泳げばよいだろう。したがって企投する者は、自らの目的を実現するための手段をさらに企投し（下位の企投）、そのことによって計画を詳細化していく必要がある。このとき充填は「遷移や因果についての知識」を用いることによって行われる<sup>(24)</sup>。減量の例に関して言えば、われわれは体重とカロリーの相関についての法則知を用いて手段を選択するのである。それゆえ企投することは、目的を実現するための必要条件として行動や出来事を充填していく目的論的な計画立ての作業を必要とする。

ここから、リクールがとりわけ企投を実現する計画を構想する作業のうちに、筋立てと同様の目的論的な統合形象化のはたらきを見いだしていることが理解される。この点に『意志的なもの』と『時間と物語』の議論を結びつける結節点が認められることは明らかであろう。結びにおいて議論をまとめることにしたい。

## 結 『意志的なもの』と『非意志的なもの』から『時間と物語』へ

熟慮において企投を詳細化する作業は、目的を実現するための必要条件として下位の企投を充填していく目的論的な推論の作業としてとらえられていた。すなわち、決意においてわれわれは行為の計画を筋立てる。われわれは自らがもつ知識を

動員して、企投された目的がいかんにして実現されるのかを自らに説明しているのだと言ってもよいだろう。それは一方で、下位企投や予見される出来事が計画全体のなかで独自の意義を与えられるということでもある。リクルールは冒頭に引用した『時間と物語』の一節において、行為の可読性が「行為の意味論を構成する間主観的意味作用のネットワークの制御」を条件とすると述べていた。この制御は「行為主」「目的」「手段」「動機」「状況」「援助」「敵対」「協力」など、行為に関する「概念のネットワーク」を利用できるわれわれの能力にもとづいている。ただしこれらの諸概念が「統合性と現実性」を獲得するのは「物語の統辞的次元」に移されるときである「[R11]」。したがって、われわれが自らの行為についてこれらの概念を有意義に用いることができるのであれば、それは行為の道筋を筋立てることによってであろう。そして実際にわれわれはこれらの概念を有意義に使用しているのだから、われわれは確かに実践において筋立てを行っていると考えることができるのである。

筋立てられた計画は、私が実際に行動を開始することによって、自己制作のプログラムとして機能することにもなる。決意という志向性の独自性は『決意された行為は、決意した者によって必ず実現されなければならない』という規則によって構成されており、この規則に従うことによって生じる自己帰責を通じて、「展開された統覚」としての「私」が成立するのであった。このとき計画を筋立てることは、企投された行為の主体としての「私」を物語の終りに、また現在の「私」を物語の始めにおき、両者のあいだに様々な下位企投や出来事を充填することで、現在の私が未来の私に変化するまでの出来事の論理的連続性を構築することを意味する。すなわち計画とは、企投する主体が、将来の行為の主体としての自らを実現するために、自分自身に物語るものであり、企投する主体は計画の時間的ひろがりのうちに展開された人格として自らのことを理解する。これはまさしく「主体は自らが、自らについて、自らに語る物語のうちに、自らを認める」という物語的自己同一性の定式と一致する事象である。企投において理解される自己とは物語的自己なのであり、決意し行動を開始することは物語を生きること、企投された物語的自己同一性を実在的なものにしようとする過程としてとらえられる。

ただし、熟慮の過程における目的論的な統合形象化において、筋立てが明示的に言語化されることはない。そもそも実際の行為においては、計画が完全に構築されてから実践に移行することなどは稀であり、われわれは行動するなかで計画を詳細化すると云った方が正確であろう。それゆえ、熟慮における筋立ては歴史記述に比べ、その緻密さや具体性においてまったく劣る。だからこそ熟慮における筋立ては「前」物語的構造」と呼ばれるのである。さらに、企投における筋立てには偶然の出来事を前もって包摂することができない。だが一方で、現実において企投を実現する過程が筋立て通りに行くことはほとんどないと言える。予見がうまくいかなかったり、予想外の出来事が生じたりして計画が失敗するのは人間の常であるからだ。また途中で気が変わったりあきらめてしまうこともあるだろう。それゆえ、行動開始前の筋立てと、行動開始後の筋立てのあいだには否応なくズレが生じる。このとき決意が、自らが内包する筋立てそのものによって実現されることを要求する志向性であることをふまえるなら、人生を歴史化する際、その物語は決意が有していた事前の筋立てを内包することになる。したがって、われわれの歴史的な物語的自己同一性は、つねにこのズレを抱える形で成立することになるだろう。そしてこのズレは生の歴史化（自己理解）に独特の感情的な屈折を与えることになるものと考えられる。

ところで目的論的に企投を筋立てることによって、現実の秩序は意味づけられ、企投する主体にとって禁止と許容からなる可能性の総体として立ち現れるのであった。それゆえ現実には単に非意志的なものとして現れるのではなく、人間化された非意志的なものとしてわれわれに理解されている。これと同じことを、非意志的な時間についても言うことができるだろう。リクルールは企投された主目的から行動計画を具体化していくプロセスを、非意志的な時間を独自の仕方で組織化することとして次のように述べている。

企投から企投へと、私は死せる時間の上を跳んでゆく。私は先行する時点へと引き返す。私は最も関心のある未来の行為の軸線をデッサンし、空隙を埋め、目的を「実際には」その目的に先行する手段に先立って定置し、漸次的充填もしくは

付加などによって単純な企投のうちに二次的な企投を挿入していく。これこそが、現在の前方に時間を組織する人間の合目的性の方式なのである。不連続性と可逆性は空虚に指示されたこの時間の法則であり、その時間においては行為の最も注意すべき期日同士のあいだの実践的關係だけが示されている。〔VI48〕

「企投から企投へと死せる時間の上を跳んでゆく」とは、無数の等価な点によって構成される不可逆的な物理的時間を逆行すること、またその時点に重みづけを与えること意味している。このことは時間を「人間的合目的性の方式」に従って組織化することの所産である。つまりわれわれは計画を目的論的に筋立てることで、物語に包摂される行為や出来事に特定の時点と意義を付与し、これによって物理的な非意志的時間は人間化された非意志的時間に変容する。

われわれはこのような見解に『時間と物語』の時間論との連続性を認めることができる。なぜならこの見解は「時間はそれが物語の形式にもとづいて分節されるのに応じて人間的時間となり、物語はそれが時間的実存の条件となるときにその十全な意味作用を獲得する」という『時間と物語』の中心テーゼと響き合う内容を有しているからである。

もしこのテーゼにおける「物語」を完成したフィクション物語や歴史物語として理解するならば、人間的時間は認識の対象にとどまることになるであらうし、またわれわれの多くにとって人間的時間は読書を通じて与えられるものとなるだろう。だが企投が有する前―物語的構造の意味が明らかとなつたいま、われわれはこのテーゼをよりよく理解することができる。時間の人間化は歴史に先立って企投の次元において成立しているのである。人間的時間とは実践の領域において、われわれ自らが物語を語ることによる所産である。この事実が『時間と物語』の時間論を理解する上で重要な意味を持つにちがいない。その時間論の検討を今後の課題として、本論文の議論を終えることとしよう。

## 【文献表】

本論文で引用された文献とその略号は以下のとおり。引用文は筆者による日本語訳であるが、既存の邦訳も参照させていた。訳文中の（ ）は原著者、〔 〕は筆者による。訳文中における傍点原著における強調である。

- Carroll, Noël. 2007. "Narrative Closure," *The Philosophical Studies*, vol. 135, No. 1, pp. 1-15.
- Danto, Arthur C. 2007. *Narration and Knowledge* (including the integral text of *Analytical Philosophy of History*, 1965), New York: Columbia University Press. 『物語とこの歴史——歴史の分析哲学』河本英夫訳、国文社、一九八九年
- Dray, William. 1957. *Laws and Explanation in History*, Oxford: Oxford University Press.
- Gallie, W. B. 1964. *Philosophy and the Historical Understanding*, London: Chatto & Windus.
- Mink, Louis O. 1960. "Modes of Comprehension and the Unity of Knowledge," in *Historical Understanding*, Ithaca: Cornell University Press, 1987, pp. 35-41. [MCU]
- . 1970. "History and Fiction as Modes of Comprehension," *ibid.*, pp.42-60. [HFM]
- Ricoeur, Paul. 1950. *Philosophie de la volonté I : Le volontaire et l'involontaire*, Paris: Aubier. 『意志的なものと非意志的なもの I・II・III』滝浦静雄・箱石匡行・竹内修身訳、紀伊國屋書店一九九三年 [VI]
- . 1976. "L'imagination dans le discours et dans l'action," in *Du texte à l'action : Essais d'herméneutique II*, Paris: Seuil, 1986, pp. 213-236. [IDA]
- . 1977. "Expliquer et comprendre : Sur quelque connexions remarquable entre la théorie du texte, la théorie de l'action et la théorie de l'histoire," *ibid.*, pp. 161-182. 「説明と了解」久米博訳、『解釈の革新』新装版、二〇〇五年 [EC]
- . 1983. *Temps et récit I : L'intrigue et le récit historique*, Paris: Seuil. 『時間と物語 I』久米博訳、新曜社、新装版

二〇〇四年) [TRI]

——, 1985. *Temps et récit III : Le temps raconté*, Paris: Seuil. (『時間と物語 III』久米博訳、新曜社、新装版、二〇〇四年)

[TRIII]

Searle, John R. 2001. *Rationality in Action*, The MIT Press. (『行為と合理性』塩野直之訳、勁草書房、二〇〇八年)

Velleman, J. David. 2003. "Narrative Explanation," *The Philosophical Review*, vol. 112, No. 1, pp.1-25.

井上義彦 1990. 「図式と象徴」『カント哲学の人間学的地平』第五章、理想社、一四九—一六九頁。

櫻井一成 2011. 「リクルールの解釈学——詩的言語から企投としての自己理解へ」『美学』二三九号、一一一二頁。

円谷裕二 2002. 「反省的判断力と超越論的哲学」『経験と存在』第十章、東京大学出版、二三—二五九頁。

註

- (1) リクルールは、物語によって変化の歴史を物語ることが、少なくとも通時的な自己同一性にとっての必要条件であると主張している。自己同一性に関するリクルールの考え方については、自己をめぐる問題系を包括的に論じた『他者としての自己自身』(一九九〇年)を分析の中心の対象とした上で、機を改めて論じなければならない。
- (2) 詩的言語と企投としての自己理解の結びつきに関しては、「櫻井 2011」を参照されたい。
- (3) リクルールは「日常経験に即するならば、人生のエピソードの連鎖のうちに、《(まだ)語られていないストーリー》、語られることを求めているストーリー、物語の足がかりを提供するストーリーを認めたくないだろうか」[TRI4]と述べるにとどまり、なぜこのような実感が生じるのかについては明らかにしていない。
- (4) 管見の限り、「経験の前—物語的構造」という概念を『意志的なもの』における行為論との関係において分析した先

行研究は見当たらない。

- (5) リクールは「物語の擁護」と題された章(第二部第二章)において、William Dray、Georg Henrik von Wright、Arthur C. Danto、H. B. Gallie、Louis O. Mink、Hayden White、Paul Veyneらの議論を取り上げ(それぞれに一節を割いて)、批判的な読解を行っている。本論文の目的にとってとりわけ重要なのは、ダントー、ミンク、ガリーについての読解である。

- (6) 統握はほかに「holding together」「grasping together」「thinking together」「seeing together」など言い換えられている(本論文ではこれらをすべて「とりまとめ」と訳す)。これらの表現からもうかがえるように、ミンクは統握が「知識」ではなく、むしろ知識の運用をそこに含むような人間の理解する「はたらき」や「活動」であることを強調している [HF55]。

- (7) 残る二つは、さまざまな物事を同じ法則や仮説の例化としてとらえる「仮説演繹的」ないし「理論的な統握」と、さまざまな物事を同じカテゴリーの例化として(ただしそのカテゴリーは一つの超越論的な概念枠組みの構成要素としての意味をもつ)とらえる「カテゴリー的統握」である [MCU38-9]。

- (8) この例はミンク自身によるものであるが、厳密に言えば《オフアーを受諾する》ではなく、《オフアーに返事をする》と記述されるべきだろう。電報を送ることが《オフアーを受諾する》と記述されるためには、《受諾する場合に限って返事をする》という(制度的ないし個人的な)取り決めがストーリーに包摂されている必要がある。

- (9) リクール自身も認めているが [TR263]、ダントーにとっても歴史記述は物語文制作に還元されるものではない。本論文一章三節で述べるように、ダントーにとって物語文はそれ自身が被説明項であり、物語文によって記述された変化の原因を特定することが歴史的説明の課題とされる。そしてこのような歴史的説明についての考え方は、実はリクールのそれとおおむね一致している。それにもかかわらず、リクールは当該のダントーの議論を紹介していない。



これが意図的な看過なのかどうかについて判断することはできないが、少なくとも歴史的説明の本性をめぐる議論それ自体に関して言えば、リクルールは《ダンター派》であるという表現を用いなければならぬだろう。

- (10) 物語の統一性（閉合）に関しては「Carroll 2007」が詳しい。また物語の理解を期待（感情的解決）の次元に還元しようとする議論として「Velleman 2003」があげられる。

- (11) リクルールがガリーの議論に潜在的に認められる物語理解の回顧的側面を強調するとすれば、ミンクはガリーの議論をフォロー可能性の概念に還元した上で、批判を加えている。ミンクによれば、ガリーの言う「約束されているがつねに開かれてある結末」への期待に導かれて物語をフォローするという経験は、「ストーリーがどのように終わるのかを知らない素朴な読者」のものであり、歴史家の経験とは一致しない「HFM47」。ガリーは「期待」と「回顧」が出来事や出来事の過程に対する全く異なった態度であることに気づいていない、すなわち回顧によってはじめて可能となる出来事の記述があり、二つの視点のあいだで一つの出来事はもはや「同じ」出来事としては理解されていないことに気づいていない、と言うのである「HFM48」。ちなみにリクルールはミンクを考察の俎上に載せるにあたってこの批判を紹介し、物語の「直接的把握」と「回顧的な把握」[TRI282]のあいだで、物語の適及的把握を強調するあまりにミンクは筋立ての時間的性格を廃棄してしまったと批判している。

- (12) もちろんこのような批判的検討の作業が、フィクション物語の読書においても認められるのかどうかについては議論の余地がある。とはいえ、われわれの読書経験がその進行過程においてたどり直しの作業を含んでいるということは間違いないことであるように思われる。

- (13) たとえば、それぞれの出来事は《原因》、《妨害》、《停滞》、《偶然》などと理解されるだろう。

- (14) リクルールは物語のエピソード的次元について次のように述べている。「物語のエピソード的次元は物語の時間を線的表象の方に引き寄せる。それにはいろいろな仕方がある。まず、出来事は『それで、それで』という仕方で語られ、

このように語ること『それからどうした』という問いに答えが与えられるのだが、この語り方は筋 action の諸段階が互いに外在的な関係に立っていることを示唆している。さらに、エピソードは出来事の開かれた連続を構成する。

この開かれた連続は、『それで、それで』という語りに『以下同様にして』とつけ加えることを許す。最後に、エピソードは、物理的出来事と人間の出来事に共通の不可逆的時間順序に一致して、延々と引き続いていく [TRI130]。つまり、エピソード的次元のみからなるストーリーを年代記と呼ぶとすれば、年代記には始めも終わりもなく、出来事はただ時間の経過とともに生起し続けるということである。

- (15) 本論文では詳しく取り扱うことができなかったが、リクールは物語が統合形象化によって「主題」や「説明効果」をもつようになることを、Hayden White の物語論に即しつつ論じている。この説明効果は「物語の出来事を説明するのではなく、当の物語そのものを、それが属するクラスを同定することによって説明する」ことで生じるとされる [TRI292]。

- (16) 本来カントにおいて規則の適用は規定的判断力の仕事であるが、円谷裕二氏の解釈によれば、規則が与えられているとしても「特殊をその特殊性に即しながら『具体的に』判断するような判断」を行うのは反省的判断力の仕事である [円谷232]。また井上義彦氏は、対象の直観を概念のもとにもたらず際、その特殊なもののために普遍が見いだされねばならないのだから、直観の悟性化の働きは既にして反省的判断力の仕事であると述べている [井上154]。これらの指摘に従えば、医師の診断や裁判官の判決はたしかに反省的判断力によるものである。

- (17) リクールが物語的理解に対する再評価の端緒として紹介する William Dray は、特殊なケースを取り扱う歴史家にとつて、必要条件の集合が本当に出来事の生起を説明できているかを決定する法則は存在せず、歴史家は多様な要因の集合を比較衡量することによって妥当な「判断 judge」を行わなければならないと述べている [Dray55-6]。

- (18) 中性的な意味は抽象によって判断から取り出されるものであり、場合によってそれは異なる判断によって共有される

ことがある（「雨が降るだろう」「雨が降ってほしい」）。

- (19) 『意志的なもの』において、想像力は「企投を虚構的に充実すること」によって、ときに企投を妨げるものとして扱われている [VI45]。だが意志の詩学において想像力は企投を生成させる根本的な能力としてとらえられるようになる。企投をめぐる『意志的なもの』と意志の詩学の議論に大きな違いがあるとすれば、それは想像力の評価をめぐる違いである。

- (20) John R. Searle は、リクールが言うような存在判断と実践的判断の差異を「適合の向き direction of fit」の違いとして説明している。存在判断であれば「世界のなかで独立して存在する事態に合致するのは、信念の責任であるから、信念は心から世界への適合の向きをもつ [Searle37]」。一方実践的判断であれば、「世界の方が欲求の内容に合致するように変化しなければならない」ため、欲求と意図は「世界から心への適合の向きをもつ [Searle38]」。

- (21) たとえばリクールは決意の生成過程について次のように述べている。「ためらいとは多様な企投の粗描である。したがって選択は、企投する意識が突然現れることによって生み出されるのではなく、ためらう意識の単純化によって生み出される。（中略）ためらうことはさまざまな理由を渾然とした状態で手にしていることであり、熟慮することはこれらの理由を整え、明確なものとすることであり、選択することは一つの選好判断を理由にもとづいて出現せしめることである [VII60]」。

- (22) リクールは一九七七年に書かれた論文「説明と理解」のなかでも次のように述べている。「自然のなかでの身体の位置についてよくよく考える必要があるだろう。それは複数の身体 of なかの身体（複数の物体 of なかの物体）であると同時に、反省し、自らを取り戻し、自らの振る舞いを正当化することができるような存在の実存状態でもある。認識論上の議論はまったく表面的であって、明確に主張されるべき人間学のきわめて重要な論点を実際には隠しているのである。人間とはまさしく、因果の体制と動機の体制、つまり説明の体制と理解の体制に同時に属する存在である」。

る [EC171.2]。」のような身体の両義性ゆえに、動機づけの秩序は因果の秩序に関わることができるのであり、リクールはこの関与を「事物の流れへの行為者の介入」と表現している [EC174.5]。

- (23) 意志の哲学にとっての問題は、このような熟慮が決意を必然化しないということ、熟慮の過程と決意の瞬間のあいだには飛躍があるということである。この点に関するリクールの議論に関しては機を改めて論じることとしたい。

- (24) 実際には、因果法則に関する知識以上の知識が必要であろう。つまり手段を企投するための推論には、規則や法律についての知識も用いられるはずである。たとえば《結婚するために婚姻届を出す》、《海外旅行に行くためにパスポートを申請する》などの推論は、制度に関する知識にもとづいている。ただし、ここでのリクールの関心は意志と因果の体制との関係にあるため、リクールが因果法則に関する知識のみを排他的に想定しているということにはならない。